

Translation and Notes, The Reason of State (La
ragion di stato), Venezia, 1589, Vol.5.,
G.Botero(Morihisa ISIDGURO tr.)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/44771

翻訳と注解

G・ボッターロ『国家理性論』（1589年ヴェネツィア刊） 第5巻

石黒 盛久

Translation and Notes, *The Reason of State (La ragion di stato)*, Venezia, 1589,
Vol.5., G.Botero(Morihisa ISHIGURO tr.)

Morihisa ISHIGURO

【解題】

これまで『金沢大学学校教育学類紀要』6号、7号及び『言語文化論叢』18号、19号に掲載してきた1巻～4巻に引き続き、本稿においては16世紀後半から17世紀初頭に活躍したイタリアの政治思想家G・ボッターロの著作『国家理性論』の第5巻の翻訳に取り組む。国家の諸形態を分類し、永続性の点における中型国家換言すれば現状維持国家の優越を指摘するとともに、そうした現状維持国家の指導者（世襲君主）が備えるべき資質一般を考察する第1巻、現状維持を前提に〈国家理性〉（*ragion di stato*）に基づく自国の利益の貫徹を実現する指導者＝君主の〈思慮〉（*prudenza*）ならびに〈能力〉（*valore*）と、それによる〈名声〉（*riputazione*）の増大に焦点を当てる第2巻、〈名声〉獲得の具体的方策（武勲と公共事業）を説く第3巻、国家の具体的統治策の実践の上で、中産階級にその政策の重心を据えつつも、有力者と貧民という二つの例外的存在の操縦に留意し、社会を構成する諸階級間の均衡を実現することを論じた第4巻を踏まえ、本第5巻においては、新たに獲得された領国とその臣民を如何に取り扱うかに焦点が当てられている。中型国家論に基づく現状維持を理想とするにもかかわらず、それでもなお生じる国家間の紛争やそれに由来する外交交渉＝戦争

＝領土の拡大・縮小が、政治指導者＝君主を国際関係における道徳秩序の欠如という事実と直面させ、通常市民の道徳意識を超越した〈国家理性〉の行使の必要を余儀なくせしめる。そればかりではない。こうした対外関係における〈国家理性〉行使の必要性は、新たな領土やその住民の獲得を契機として、既存の国家秩序の根底に存する秩序の外部を操作するための、内政的〈国家理性〉の厳存へと、支配者の関心を向けさせることにもなる。このような〈国家理性〉意識の先鋭化とともに君主の行動は、自身の美徳に対する臣民の共感や福利の提供を通じた彼らの同意の確保といった「人間の術」の側面から、彼らを素材として突き放し、飴（狐）と鞭（獅子）を媒介にこれを操作する「獣の術」へと踏み込んでいくこととなる。

【翻訳と注解】

第五巻

1 獲得された臣民たちにつき如何にして彼らを心服させるかを論じる

もし私が誤っていなければ我々は既に、本来からの臣民たちを御する法については、これを十分に論じたように思う。そこで残された課題はここまでそうしてきたように、今度は獲得された臣民につき手短かに論じることとなる¹。そ

ここで君主がまずもって留意せねばならないことは、これらの獲得された臣民たちが君主の支配や統治と利害を共にし、あたかも本来の臣民同然のものとなるよう全力を尽くすべきだということに他ならない。それと言うのもさもないければ人民の彼への好感が全く欠けているため、彼の国家はあたかも、しっかり根づいていない樹木のようなありさまとなってしまうからに他ならない。即ち、些細な風がしっかり根づいていない樹木を大地にたたき伏せてしまうのと同様に、ほんのちょっとした事件によって、君主に好感を抱いていない臣民は君主から離散してしまうからだ²。少し運勢の風向きが変わるや、彼らはたちまち勝者の麾下に馳せ参じてしまう。このようにして国家の変動や革命が生じることとなる。フランス人は晩禱の一瞬の間にシチリア島を喪失し、またごくわずかの期間でナポリ王国とミラノ公国をも失った³。これは他でもなく彼らの統治のやり方が、その地の人民と利害を共にし、彼らにその支配を支持し擁護する気持ちを掻き立てるようなものではなかったからである。こうしてフランス人の治下にあろうとスペイン人の治下にあろうと、あるいはその他の何者の治下にあろうと自分たちにとりどうでもいいことだと見てとった住民たちは、フランス人のために自身の剣を抜く気を失ってしまったのである。フランスの国王たちやミラノの諸公が、ジェノヴァの支配権を幾たびとなく失ったのも⁴、あるいはまたラテン人たちがコンスタンティノープルの帝国から追い出されてしまったのも同じ理由による⁵。イギリス人が大陸に有していた広大な所領を失った原因もまたそれだ⁶。彼らは現地臣民の共感をかちえ、その意向をくみ取る術を知らず、住民たちが彼らの支配と利害を共にするように支配を行うことを怠ったのである。トルコのセルムがマムルークと戦争した際にシリアとエジプトの人民は、その性狀尊大な野蛮人に過ぎないマムルークの支配に飽き果て、それに不満を嵩じさせていたので、マムルークどもを支援しな

かったばかりか、自ら進んでトルコの前に諸都市の門を開いたのであった⁷。従って臣下の心をつかみ、当該君主の治下にあることが、そしてまたその支配を擁護するために闘うことが、臣下の利益となるようなやり方でその統治をおこなうことが肝要である。それは我々が前の巻で本来の臣民につき述べたように、彼らのもとで君主が共感と名声を獲得すべき種々の手段を通じて実現できるだろう。なかんずく彼らを正義と平和と豊穡のうちに置き、宗教と学芸と道義を尊重することがそのためには有効である。なんとすれば聖職者と文人と高德者は、他の人々の頭となる人々だからである。それゆえこれらの人々の気持ちをつかむことが出来れば、その他の者たちの気持ちは容易にこれをつかむことが可能となる。即ち聖職者は人民の良心を、文人は才知を司っている。こうした人々の判断は、その他の者どもの間において多大な権威を有している。前者はその聖性によって、後者はその学識によって、前者は彼に対する崇敬によって、後者は彼に対する名声によってかかる権威を与えられているのだ。従ってこうした人々が行ったり言ったりしたことは極めて高く評価されるし、また賢明に行われたり発言されたりしたことは、受容されまた追従されることとなる。また卓越した技能を有する職人はその分野を問わず、他の人々からの尊敬を享受している。だからこうした人々を支援し自分の傘下におさめる君主は、あらゆる人々たちから容易に崇拜されたり評価されたりすることになる。カール大帝こそまさにそのような人の一人であった。彼は宗教に好意を寄せ、始終文芸を後援したが、それに加えて貧者に対し信じられないくらいに寛大で慈しみ深い人物であった。人が服従されたり愛情を向けられたりすることにつき、これ以上望ましくまた有効な手段はないし、これ以上に万人から讃嘆賞美されることもない。それが放縦さと化さない限り慈悲はとても有用なものである。また赦免や恩恵の付与は当人の性格から、あるいは自身の自発的判断か

らなされたものであるかのように見せかけ、反対に処罰は不可避の必然や、正義や公共の安寧に突き動かされてなされたものであるかに見せかけることが肝要だ⁸。それゆえネロ帝はその治世の初めにおいて、寛大であるふりをするにより、万民から驚くばかりの愛情と恩恵を獲得したのであった。そこである人物を処刑に付す法官たちの判決書が、彼の裁可を受けるため上奏された際に彼は、ため息をつきながら「ああ！字を書くことを知らなければよかったのに」と言ったほどであった。

卓越した美德の光輝は単に臣民をつなぎとめるためのみならず、それ以上に敵を心服させるために役立つ。このことはアレクサンドロスやスキピオをめぐる逸話が証立ててくれる。フィリスキ人に対するカミルスの魂の偉大さや、ピュロス王に対するファビウスのそれもその証となる。それ以上に着目すべきはミシコーネ公に相対した皇帝コンラートの魂の偉大さである⁹。コンラート帝に圧迫されたこのポーランドの公は、ボヘミア公オドリコのもとへと逃げ込んだ。彼はこの公からの援助や好意を期待していたのだが、この考えは完全に裏切られることとなってしまった。なんとなればボヘミア公はその軽薄さから、そしてまたその貪欲さから、彼をその手に引き渡すべく皇帝と交渉し始めたからである。だが皇帝は誠実な性格の人間でありこのような不実を嫌悪して、その饗応主から自身を守るようにとミシコーネ公に伝えたのだった。かくしてその敵手の善良さや美德に驚嘆したミシコーネ公は、自ら進んで皇帝の軍門に下ったのである。

だが何にもまして大事なことは、臣民と交わした条件や協約をきちんと守るということに他ならない。それというのもそれに基づき彼らがその支配下に入った条件の改変ほど、新たに獲得された封臣や臣民の気持ちを動揺させるものはないからである。我々〔キリスト教徒〕をシリアから駆逐したダマスカスの王ノランディノ〔サラディン〕にとり、その言葉の厳守ほど役

に立った事柄はなかった¹⁰。なんとなればこれまで彼に対して負担していた額を度外れて加重したり、彼が彼らに約束したことを決して忽せにしたりしないことを見て取った住民たちは、彼に喜んでその身を委ね、彼の言いつけに素直に従ったからである。教育ということもまた極めて重要だ。まさに教育〔の成果〕こそは第二の天性であり、この手段を介して獲得された臣民も、さながら本来の臣民同然の者となるからである。この目的に沿ってアレクサンドロス大王は、ペルシアの三千人の若人を選抜したのだ。大王は彼らをその衣装や武具、言語そして風俗においてマケドニア風にならって養育した。それは彼らを戦争に際して、マケドニア人と変わることなく活用しようとの目論見からであった。トルコの皇帝もまた同様に、獲得された臣民中のキリスト教徒の子弟であるイエニチェリに教育を施すことにより、彼らを皇帝の最も忠実な兵士に育て上げている。彼らは皇帝の身辺警護の任に当たるほか、忠信と能力を共々要するが如き重大任務に携わる。結局トルコの皇帝はこの教育という政策を通じて、一石二鳥の利益を手にするようになる。即ち彼に親近感を抱かぬような臣下をしゃにむに排除するとともに、こうした者たちの子弟により自身の権力を強化することが出来るのである。〔獲得された臣民の融合という〕こうした目的のためには、君主自身や彼の治下に本来あった臣民たちと、獲得された臣民の間における婚姻もまた有効である。アレクサンドロス大王はペルシア女性ロクサネを娶ることにより、東方の蛮族どもとのめざましいばかりの和解を成し遂げた。この婚姻を通じて彼らは、好ましくもまた慈悲深い統治に与れるとの確信を持つに至ったのだ。またリヴィウスの語るところによればカプア人たちが、ハンニバルの破竹の勢いに乗じる形で造反を企てた時、ローマ人との間に結ばれた親類関係ほど、この挙に出ることを彼らに躊躇させ押し留めたものはなかったという¹¹。獲得された臣民の心をつかみ取る最も崇高なやり

方は、タルクィニウス・プリスクスにより用いられたようなやり方だろう¹²。剛強なるラテン人を打ち破った時この人物は、彼らに対し貢物を課したり、また彼らをその臣下に引き下げることなく、彼らを自身との同盟関係に参与させたのであった。このことこそはローマの強大化の最も重大な基盤となった。なぜならローマ人の軍隊に負けず劣らず剛強なラテン人の軍隊が、[これから後にはローマ人のために] 自ら進んで力の限り戦ってくれるようになったからである。この盟約はタルクィニウス・スペルプスによっても更新された。彼らラテン人の若者全てを招集したが、彼らに独自の指揮官や旗印を与えず、むしろローマ人部隊の中に編入した。つまり二つの民族の軍隊はローマ人指揮官の下、一つの軍隊を構成するに至ったのである¹³。この王はまた同盟を構成する47の都市により厳粛な儀式を以て、アルバの山の地にラツィオのユピテル〔ヤヌス〕の神殿を建立せしめた。そしてこの神殿において年に一回ラテン祭を挙行し、ローマ人たちがそこで捧げた一頭の犠牲牛〔の肉〕を、上記各都市に分け与えた。そこで見て取れることは別の所でも我々が考察した如く、それがたとえ同盟という名を有していても、実はそこにおいてローマ人が万事を牛耳っているという事実である。獲得された国々に自国の言語を導入することも有効な施策である。それはなにかんずくローマ人により実行された。アラブ人も北アフリカとスペインの大半において、同様の政策を行っている。あるいはノルマンディー公ウィリアムもまた、イングランドにおいて同じ政策を行ったが、それは[彼によるイングランド征服以来] 500年に及んでいる。支配者の言語を導入するにあたった肝要なのは、法律をそれにより書き記し、また君主やその官吏が聴聞をこの言語によって行うことである。このようにして交渉ごとの締結書や指示書き、書簡や免許証その他同様の文書が、この言語で記されるようになる。カール大帝の逸話でこの章を締めくくろう。ランゴバルト人

を駆逐した彼は、その土地と人民を奪い取りこれをローマ教会に寄進した。そしてこの地方をローマニヤと呼んだが、それというのもこの地の住民が、以前彼らがその支配のもとに服していたギリシア人のことを忘れて、ローマとローマの教皇に親近感を抱くようにするためであった。

2 異教徒と異端について論じる

さて以下において臣下のうちの二つの種類の者たち、即ち異教徒と異端者について語ろう。何にもましてこうした者たちを正統信仰に引き戻し、彼らの忠誠を確保することが大切である。なぜなら人間相互間において信仰の相違や対立にもまして、相違や対立を生じさせるものはないからである。従ってここまで論じてきたようなさまざまな手段もまた、こうした者たちの心をつかむにあたって有効ではあるものの、彼らを説き伏せるそれに劣らず根本的な手段は、改宗ということになろう。ところで彼らを〔カトリック信仰に〕改宗させる手段は様々にある。まず大切なのは多数のかつ優秀な協力者を獲得するということだ。彼らはその学識と反論を許さぬその模範的生活を通じて、これらの迷える子羊たちを真理へと誘い導くのである。これらの異教徒たちの子弟のために学校を開設したり、自由諸学やその他の真面目な技芸の教師を揃えることもまた、想像以上に有効な手段である。なぜならこのような策によって、異教徒の父兄と子弟を共に籠絡することが出来るからだ。異教徒の父兄はこれを、そこでその子弟に授けられる躾や戒めを通じて、我らの宗教に引き寄せることが出来るだろう。たとえばセルトリオが、良き教師を呼び寄せ若人の教育に邁進することにより、ポルトガル人たちに対する親近感を大いに高めたことが知られている。異教徒の子弟を引き寄せるということについていえばそれは、学校への通学を介してキリスト教的な信仰と美德を、いっそう容易に習得することが出来るからに他ならない。このような目

的に即してポルトガルの王たちなかんずくジョアン3世は、インドに多数の神学校(Collegi)や小神学校(Seminari)を開設した¹⁴。そこでは多くの民族の若者たちが、イエズス会の神父たちの訓育のもとに養成されている。イエズス会の神父たちはドイツや新世界においても同様の手法により、めざましい成果を上げている。それというのもドイツにおいては、彼らイエズス会士たちが所在する都市はカトリック信仰に留まることになったし、既に異端に汚染された都市もまた彼らの働きにより、そこから数多く救出されたからである。またブラジルにおいても彼らの働きにより、その住民が実に数多く改宗することになったし、既に改宗した新スペイン〔メキシコ〕やペールの人々の間においても彼らは、豊かな成果を上げている。それというのもこれらの地の住民たちは、当初最初に派遣された聖職者たちの手により、大した訓戒も施されず授洗されたが、いまイエズス会士たちが開いた学校や彼らによる幼児教育を通じ信仰面において刷新され、その慈悲心において改良されたからに他ならない。

だがこのような教師たちは、彼らからの良い薫陶を期待し得るような、醜聞を引き起こす心配のない人物でなければならない。彼らは学識の保有者であることはもちろん、それに加えて貞節の恵みを与えられ、食欲さや吝嗇に無縁の人物であることが求められる。なぜなら好色や物質への執着にもまして、人間の善行や精神的救済を汚すものはあり得ないからである。そこで君主の側においても、子弟の教育のため多数のよい資質を持った教師を育成することが求められるし、同様に多数のかつ厳肅なる説教師を手配することが必要なる次第である。こうした説教師はその学識とその弁舌の冴えにより、我々の聖教の神秘をわかりやすく説き聞かせることを心得た人材である必要がある。こうした異教徒たちを聖教の真理に導き入れるためには、いろいろな特権といったものも役に立つことだろう。それは改宗した者だけに特に与えられる栄

誉や利便に他ならない。その実例を挙げると、武器の携行や軍隊勤務の許可、司政官職への登用や租税の全面的ないしは部分的な免除等々といった、時節に応じて推奨される措置である。ポルトガルのインド副王コンスタンティノ・ブラガンサは受洗者や新キリスト教徒を表彰し慰藉することにより、これらインドの国々において聖教を大いに広めた。またユスティニアヌス帝の熱意も見過ごされるべきではあるまい。エバグリオスの伝えるところによれば彼は、彼らに金銭を提供することによってエルリ人を信仰へと導いたのである¹⁵。またこれと同じやり方を使ってレオ6世帝もまた、ユダヤ人たちをこれと同じ教え〔ギリシア正教〕へと引き入れたのだった¹⁶。

3 反覆常ならざる者どもについて

こうした異教徒たちの中でも、キリスト教信仰にもっともかけ離れているのが、マホメット教徒どもだ。なぜなら彼らの宗派は肉的なものに極めて傾いているから、福音の精神をおのずと嫌悪してしまうのである。同様の理由から異端者どもの中にあっても、聖教の真理から最もかけ離れているのがかのカルヴァンの輩である。この連中がはびこるところはどこであろうと、天使たちが告知しキリストが我らに教えたもうた平和にとって代わって、戦争がもたらされてしまう。彼らに国家の大事を委ねるなど、まさに狂気の沙汰に他ならない。なぜなら経験が私たちに教えてくれるように、彼らが権力を握るに至ったところにおいて彼らはたちまち騒動を引き起こし、武器を手にし立ち上がり、実は不信心や悪意を内に秘めた信仰の名のもとに、戦火を伴って彼らの悪しき思いを恣にするからだ。それというのもこの手合いには学理というものがないから、そしてまた諸聖人の権威をも欠いているから、自身の宗派をトルコ人どもよろしく、武器を使って擁護するほかどうしようもないからなのだ。この連中こそがいとも「キリスト教的なる国王」(フランス王)から、そ

の王位のみならずその生命まで奪おうとした輩であるし、またカトリック王（スペイン王）に対して、その累代相続の領国（フランドル）を反乱に立ち上がらせた連中でもある¹⁷。また彼らこそがメアリ女王に対して反旗を翻し、彼女をそのスコットランドの王国から追い落とし、正統信仰に反し彼女を獄に投ぜしめ、遂にはあらゆる人間的法に逆らって殺害せしめた元凶なのである¹⁸。こいつらはその上あろうことか、浅はかな交換条件を提供しトルコ皇帝を、ヨーロッパのキリスト教諸王侯にけしかけたりもしているのだ¹⁹。こいつらは認識の自由、というよりはむしろ身口意の自由を言い立てて、概して官能に弱い人間を容易に仲間に引き込み、彼らを彼らの好ましいと思う方面へと振り向かせてしまう。なぜならこの世には、新奇なことや騒動を喜ぶたちの悪い人間が満ち満ちているからだ。彼らは国家の荒廃によって自身の悪行を覆い隠し、物事の混乱の陰で彼ら個人の利益を満たすためにそのようなことを行うのである。カルヴァンやその弟子どもはこうした連中の大頭目なのだ。彼らは人間を墮落させる誘惑のみを事とし、反抗を煽り立て、悪意をもつ者にはそのはけ口を、野心家に対しては馬鹿げた希望を掻き立てている。彼らは絶望した者たちに武器を取らせ、カトリック教会を略奪の餌食とし、教会財産を強奪的としている。そして戦鼓の響きと共に聞き取られる彼らの言う処の福音の陰のもと、平民を貴族に、臣民を主君に齒向かわせている。彼らは厚かましくもカトリック信者のいろいろな悪行を言い立てては、単純な輩が公私の物事の一切の転倒するように徐々に引きずり込んでいこうとする。時に応じて彼らは都市を占拠し砦を築き、海上では私掠行為を恣にしている。要は彼らはこの世界の平和をだいなしにしているのだ。こいつらに対する有益な治療法は、他の不都合に対するそれと同様、かかる不都合の発端に注意を払い、その後には彼らを改宗させるため、先に記した如き対策をとることである。しかし彼らを真理に導

く希望がない場合、そしてまた何らかの方法で彼らが我らの支配に親近感を抱くようになる希望がない場合、テレンティウス・ヴァッロがホスティリウスに与えた助言を我々もまた、活用する必要がある。即ち彼は、トスカナ人がローマに対し忠信と平穏を保つ望みを、たとえばそのようなたくらみを抱いても、彼らが実際に造反に走れないようにしてしまうことに賭けたのであった。これは次の三つのやり方で可能となる。まず謀反に走ろうという彼らの意気をくじくこと、次に彼らの実際の勢力を削いでおくこと、そして最後に彼らが団結する術を取り上げることである。なぜなら反乱というのは、意気の盛んさと勢力の強大さ、そして団結した人数の多さから生じるものだからに他ならない。

4 敵対者どもの意気を如何にしてくじくにつぎ論じる

敵対者の意気をくじくという点につき有益なのは、その活力や猛気の増大を促す一切を彼らから取り上げてしまうことである。その実例はトルコ人の治下においてキリスト教徒が貴族の待遇や血統的特権、騎乗の榮譽といったものから厳しく排除されていることに窺える。同様に、ディオクレティアヌス帝やその他のキリスト教会迫害者たちは信者に対して、軍隊勤務の榮譽や武芸の修練を禁じ、東ゴート王テオドリックは同様の措置をイタリア人に対してとったのであった。如何なる官職につくことも彼らには認められなかったし、荘厳さや偉大さ豪壮さを示す如何なる装束を身にまとうことも許されなかった。むしろ彼らは卑陋な衣服を着用することを強要されたのである。それは一般に他の何ものにもまして、卑賤な衣装を身にまとうことほど人間の意気をくじくことはないからである。オスマン・トルコ人どもがキリスト教徒に白いターバンの着用を認めないのも、まさにそのことによる。サラセン人たちはペルシア人からその名前さえ取り上げてしまった。そ

れはこのようにすることで後者が、その古来の栄光や猛気すら忘却してしまうようにとの慮りからであった。ノルマンディー公ウィリアムはイングランド王国を征服したとき、この地の住民どもの意気を削ぐため従来のあらゆる制度を廃止し、ノルマン語〔フランス語〕によって記された新たな法を与えたのであった。それはこれによりイングランド人どもがいまや、異民族の支配下にあることをわきまえ、法と言語の新しいさを通じて、その思想信条を変えてしまうようにとの謀であった。

エジプトのファラオがユダヤ人に対して行ったように、こうした人民を疲労困憊せしめることも〔その意気を阻喪させるためには〕適宜であろう。あるいはユダヤ人がガバオン人に対して行ったように、またローマ人がカラブリア人に対して行ったように、彼らを卑しい職に縛りつけてもよい。彼らをして、農業やその他の手仕事のような単調で機械的な仕事に従事させるのも妙案だ。なぜなら農業は人間を村や土地のことにかかりつきりにさせ、かくして彼の思いをそれ以外の高尚な物事に向けないようにしてしまうからである。それだからアテネのキモンは彼以外のギリシア人たちに、農地の不輸入権や兵役免除をいとも安易に与えたのである。このようにすることによって、自身の農園の耕作にたずさわった連中はそれに熱中し、陸海の常備軍によりキモンが彼らの上に押し付けた、その統治の是非など彼らにはもはやどうでもよくなってしまったのである。商業もまた人間をその仕事場に縛りつける。彼の生計は偏にこの仕事場にかかっているのだ。なぜなら職人の資産収入というものは専ら、商品や彼ら自身の肉体労働を金に換えることにかかっているからである。それだから彼ら職人は必然的に平和の愛好者となる。平和の恩恵によって商業は花開き、交通は次第に延び広がっていく。かくして我々は、職人や商人がたくさんいる都市ほど、平和や静穏を愛好するものだという事実を目を向けることになる。クマエの僭主アリストデモ

スにつきハリカルナッソスのディオニシウスが語るように古代の僭主たちは、上記の事柄に加え治下の住民の子弟を女性化する癖にも留意した²⁰。アリストデモスは、彼が殺害した者たちの子弟が再び頭をもたげることはないように、それどころかこうした子弟がまったく以て意気地なしの人畜無害なものとなるようにと意図したのである。このような意図のもと彼はこれらの子弟たちを、彼らが二十歳になるまで完全に女性的な流儀で養育させたのである。彼らは〔女性的ように〕ゆったりとした裾丈がくるぶしまである寛衣チュニツクをまとい、また巻き毛にした髪を長く伸ばした。そしてこの頭には花冠をかぶり、実際にそうである以上に優美柔弱に見えるよう、あらゆる化粧粉を顔に塗りつけた。そうしたうえで彼らはためらうことなく女性と交際し、その結果として女性的で軟弱な風俗習慣を身に着けたのだった。これによりあたかもキルケーが人間を獣に変えてしまったように、この僭主もまた若者を女に変えてしまったわけだ。だがこれは実に馬鹿げたことでもある。実際に男が女に変貌してしまったところでは、逆に女が男の仕事を代って行うようになる。そして男たちに裁縫仕事や化粧が委ねられた結果として、女たちが武器を取り、アリストデモス当人の身に起ったように、僭主に対して男たちがなすべき復讐を成し遂げることになるに違いない。繊細で柔弱な音楽が人間を女性化し、意気地ない者にしてしまうことについては多言を弄すまい。アルカディア人はその在所の地理条件の厳しさから、素朴で勇猛な生活習慣の持ち主であった。そこでこの地の長老たちが彼らの猛気を和らげようと、この地に歌舞音曲を導入したのである。これらの音楽の中でももっとも軟弱で繊細であったのが、五声調や七声調という音楽であった。これらは古来リディア人やイオニア人の下で盛んに行われたが、その結果としてこの地の人々は閑暇や快楽に溺れるようになってしまった。だからこそアリストテレスはその共和国において同様の音曲を禁止し、一声

調即ちドーリア音階が行われることを望んだのであった²¹。

5 人間が勇猛果敢なる者となるにつき文学の素養が有用であるか否かにつき論じる

さて我々は先に教育という問題について論じたが、文学研究がその主要な一部分であることは論を俟たない。そこでここにこうした研究が、戦争にいかほど役立つものか否かにつき、二言三言言及するのも無駄ではあるまい。なぜなら反覆常ならざる連中に、こうした学問を授けるべきか否か、君主は判断を下さなければならないからである。議論にあたり我々は次のことを前提に置くこととしよう。即ち、文学は勇猛心に対して二種類の相反する効果を及ぼすのである。一つには文学が人の心を奪い取る場合、それに携わる者はアルキメデスの例が示すように、それ以外の何物にも関心を向けなくなってしまうのである。ローマ軍がシラクサの街を略奪していたにもかかわらず、彼はそれがあたかも彼にはまったく無関係の出来事であるかのように、自身の思索に没頭してしまっていたのだ。二つ目として文学は人間を、全く狂わせしてしまう場合がある。このことについてはアリストテレスも語っているし、経験もそれを裏付けるものである²²。それは武人に求められる活発さとは、全く相反する傾向に他ならない。第一の側面につきカトーは、彼らがもしギリシアの文学にうつつを抜かすようになれば、ローマはその〈世界支配権〉(Imperio)を失うことになるだろうと常々警告していた²³。なぜならアテネから三人の弁論家がローマにやって来た時、[ローマの] 若者たちが先を争って彼らに付きまとうのをカトーは実見したからである。そこでカトーはローマの若者たちが学問に身を入れる余り軍務をおろそかにしないよう、彼らを急いでその祖国に送り返すよう元老院を説得したのであった。文学が人間を戦争に不向きなものにしてしまうと判断したゴート人は、先にも言及したように、ギリシア語で書かれた

多数の書籍を焼き捨ててしまった。第二の点に関していえば、フランス人はその本性において陽気で楽しい人々である(私は貴族階級に属する人のことのみを語っているが)から、彼らは文学や文人に対してあまり重きを置くことはない。そこで才能溢れ国事につき卓越した識見を有したフランス王ルイ11世は、その息子シャルルが文学につき、「偽装することを知らないものは統治をすることを知らない」(qui nescit dissimulare, nescit regnare)というわずかなこと以外に、精通することを望まなかった²⁴。このことについては、すぐに言及することとなろう。

だがその一方で文学の才は雄々しき心構えに対して、二つの極めて有益な効果をもたらすものでもある。一つにはそれには思慮や判断力を磨く効果があり、二つ目にはそれには人間の名誉や栄光を求める功名心を掻き立てる効果がある。そこで本章にとりあげる問題に決着をつけるため、私は文学的素養は将となる者には大いに必要な才であると結論づけたいその理由はこうである。こうした文学的な素養こそが彼の眼を開き、その判断力を高め、思慮と判断力の点で、彼に多大の援助を提供してくれるからに他ならない。そうした素養はまた、栄光を望む刺激と共に彼を刺激し覚醒させる。かくして文学の素養は一面では彼を思慮ある者に、また一面では意気盛んな者にしてくれる。意気込みと結びついた思慮は将たる者をして、軍事的卓越へと導くこととなろう。かくして我々はアレクサンドロス大王やカエサルをはじめとして、これまで登場した第一級の将星たちが、軍事的に卓越していたのみならず、それに劣らず学芸上の深い見識を有する人物であったことを知るのである。ハンニバル、スキピオ家の者たち、ルクルス家の者たちその他多くの人物が、学芸の才を備えるとともに、戦争の業においても多大な能力を発揮したことは、ここに改めて言及する必要もあるまい。

先に私はこうした学問の素養を大いに必要な才と、即ち極めて有益な才であると称したが、

絶對的に必要な才であるとは言わなかった。なぜなら実に多数の卓越した将星が、文学の素養やその他の学問的知識なしに、軍事的技能の極みに一その天賦の才によってかあるいは長年の経験の賜物によって一到達しているからである。マンリウス家の者たちとかデキウス家の者たち、マリウス家の者たちあるいはディオクレティアヌス帝やセヴェルス帝その他の皇帝たちがその証左となる。こうした人物即ち将帥が如何なる類の文学上のないしは学問上の素養を積むべきか、小生は既に先に言及した。

だが小生は敢えて言おう。こうした文学的素養は兵卒にとっては何の役にも立たない。なぜなら彼らの美德は服従すること、換言すればその上官の命令を進んで実行することだからである。文学的素養は思慮や狡知を磨くものだが、それはただ将たる者にのみ役立つ能力である。なぜならこうした将たる者は兵士全体につき心にとめ、彼らに目を光らせていなければならないが、他方兵士たちはといえは彼の指揮下において、彼の命令に盲目的に従わなければならないからである。かくして我々はスイス人が、良き兵士であることを実見するに及んでいる。というのも彼らは粗野素朴であらゆる学問に縁遠い存在だからである。その点ではドイツ人やハンガリー人、そしてトルコのイエニチェリ兵なども同様である。ユリアヌス帝といえは武力を使って神の教会を大いに抑圧した人物だが、彼はまた文学研究によりキリスト教徒がいっそう賢明で思慮深い者になってしまうことを見て取り、彼らが学校に通うことや彼らが学問研究を行うことを禁じたのだった²⁵。

6 敵対者の勢力をいかに弱体化させるかにつき論じる

人心というものそれはそれが卑怯懶惰なものであっても、彼らの手中に勢力つまりは怒りをぶちまける手段があれば、その度毎に反抗に立ち上がるものである。ここでいう勢力とは、以下のような要素から構成されている。即ちそこに

結集する若人の数、武具〔の数〕—ここでいう武具の一部は軍馬や戦象のように命あるものであり、また一部は攻守の武器のように生命のないものであるが—あるいは陸海に展開する軍事兵器、兵糧や軍需品の補給、天然人為を問わぬ要害、そしてこれらを獲得したり製造したりする能力、即ち多額の金銭のことに他ならない。これらのものをことごとく、我らに敵対する者たちから奪い取ってしまわねばならない。若人たちがあるいは見識や権威の面で際立っている者たちに関していえば、彼らを自身の旗本に引きつけておくことによりこれを実現できよう。

カエサルは敵都市の降伏を受け入れるにあたり何にもまして、武器と軍馬と人質が彼に提供されるように要求した。そしてなにがしかの力量ある市民の全てがその人質となるようにしたのであった。彼はこのようにして降伏した都市から、その神経中枢となる有識者を取り上げてしまったのだ。彼はまたそのブリテン島での作戦に際して、ガリア貴族中の花形ともいえる人々を同行させた。このようにしてカエサルは彼らの心をつなぎとめるとともに、その力を活用したのである。ヘラクレイオス帝は、サラセン人やアラブ人をその支配下にしっかり押さえこんでおくために、彼らを傭兵として雇用するとの名目の下、そのうちの主要な者4000名を選抜した。だがトルコの皇帝ほどその狡知を以て、その向背の疑わしい臣民から自身の安寧を確保している者もない。既に他の所で言及したように彼は、自身のキリスト教徒の臣民から、〔イエニチェリ兵と為すことにより〕その柱となる若人を取り上げてしまっている。武器を取り上げることにに関していえば、単にそれらの使用を禁じるだけでは足りない。それらの作製のための資材や技術そのものを取り上げてしまわなければならない。なぜなら人民が強大で資材が欠けていないのであれば、職人さえいれば彼らはどんなことでもやってのけるからだ。そのことは古のカルタゴの包囲に際して実見されるところである。それというのもローマ人た

ちが狡知を働かせて、カルタゴ人から戦争のための武器や軍艦を取り上げてしまっていたにもかかわらず、それが必要ということになるや自身が有する資材を使い、当時そこにいた多数の職人たちにより彼らは、一日に矢や投石機の他に百枚の盾と二百本の剣を作って見せたからである。麻が彼らには無かったので、綱を作るために女性の髪の毛を使い、また軍船を製造するために住宅の建材を流用した。反抗的な連中を、峻嶒で容易に要塞化し得る地域に放置することは極めて危険である。ローマ人たちは武力を使ってはアプーア地方のリグリア人を馴致できなかったが、それはこの土地の峻嶒さゆえである。この土地柄が彼らをして、殊のほか獐猛で反覆常ない存在にしていたのである。そこでローマ人たちは彼らを征伐するために、彼らを山地から平野部へとわざとおびき寄せたのだ。同じくローマ人は幾度となく造反したカルタゴ人たちが祖国と海を捨てて、地中海のどこかの場所に撤収するように取り計らったのである。ポンペイウスは海賊どもを鎮圧すべく彼らを海域から陸上へと誘導した。カトーはチェリティベリ人の、パウルス・エミリウスはアルバニア人の全都市を破壊している。謀反を恐れたゴート人の王ビジタはリヨンとトレドを除く、スペインの全都市の城壁を撤去させた。また他の支配者たちは同様に謀反に走りがちな民を、他の地域に移している²⁶。プロブス帝はパンフィリアとイサウリア・パルフリオの大盗賊を取り鎮めるため、この地域から同様の反復常なき民をすべて追い払った²⁷。なぜなら彼に言わせれば、この地からこうした悪しき類の民がいなくなれば、「こうした民がこの地に蟠踞しているより、はるかに容易に盗賊どもを駆逐できる」からであった。そしてその代りその土地を古参兵たちに分け与えた訳だがその際、彼らの息子が18歳になるや、彼らをローマ軍に入隊させなければならぬという条件付きであった。それは「当地に居住することにより」盗賊になり下がるより先に、軍務に従うようにとの配慮からで

あった。アウレリウス帝も同じようにドナウ川の彼方に住むダキア人—即ち今日のワラキア人、モルダビア人、トランシルバニア人である一たちを、ローマ帝国に心服させ続けることが容易でないと見てとり、彼らを川の此方へと移住させた。サクソン人の造反に手を焼いたカール大帝はその内の10000家族を、彼らの子孫であるフランドル人やブラマント人が住む地に移した。このようにした後に正規及び特別の課税を以て移住者たちから、今日では人間の団結がそこにかかっている金銭を奪い取ってしまうべきである。こうすれば君主が十分に賢明である限り、私が先に詳述したようなことは生じることはないであろう。

7 敵対者たちの団結を阻止する法について論じる

たとえ臣下の意気を阻喪させ、彼らの勢力を削ぐために多大な努力を払ったとしても、もし彼らに団結することを許してしまうことがあれば、謀反を企てる意欲や勢力が彼らからなくなることはないであろう。この場合「(大衆が狂乱するや) 怒りが武器と化し、松明と共に石礮が飛び交う」ことになってしまうのである²⁸。

さて彼らを分裂させるには主に二つの策がある。即ち一つには彼らが示し合せるための、意欲を彼らから奪ってしまうことである。いま一つの策とは、こうした団結を引き起こす手段を彼らから取り去ってしまうことだ。示し合わせて謀反に立ち上がる意欲を彼らから奪い取るには、彼らの間に相互不信を醸成させることが肝要だ。ある者が他のものに安んじて本心を打ち明けないようにするには、信頼のおける間諜を送り込むことが有効だ。こうした点に関して、カール大帝がウェストファリア人を抑え込むためにとった施策が思い起こされる。この連中は洗礼を受けてはいたものの極めて放恣な生活を送っており、キリスト教信仰に対する不信心の疑いが晴れなかった。そこで大帝は他の通常の役人に加えて、特任裁判官を任命したのであつ

た。この任務は帝に誠忠を尽くし、かつ卓越した思慮と善性を備えた者に委嘱された。そうしてこの比類ない帝王は彼らに、彼らが帝に対する誓約に背きあるいは悪しきキリスト教徒であると判断した如何なる者であれ、他の裁判手続きを経ることなく彼らの判断するがままに、これを死刑に処する権限を付与したのである。また犯罪が明るみに出されるよう、上記の特命裁判官に加えて隠密が配置された。この隠密もまた清廉潔白な者であったが、誰からの疑いを受けることもなくウェストファリア州全体に目を光らせ、住民の言動を調査するとともに、それにつき上記特命裁判官に報告を行った。そしてこの特命裁判官は罪人が告発されるや、これを有無を言わず死刑に処したのである。つまりこの罪人が犯した罪が世に明らかになる先に、人は罪人が絞首刑に処せられるのをまず見届けることになったのだ。この特命裁判官はこの地の人民の反復常なき性情の抑圧に大変な効果を発揮した。なぜなら彼が隠密酷烈にその任務を遂行したため、善人とならなければ誰一人として自分の身を守れないことを悟り、[隠密を恐れて] その同朋に悪だくみを打ち明けるようなことが絶えなくなったからである。

謀反の手段を臣民から奪い取るにはさまざまな手法がある。まず一つはある民族だけの間で、あるいは一族郎党を抱えるある家門と別の家門間での婚姻を禁じることである。これはローマ人がラテン人に対して行ったことである。ローマ人はラテン人たちに対して、彼らが相互に婚姻を結んだり、相互に親密に交際することを禁じたのである。同じくローマ人たちはマケドニアを制圧した際に、この国を四つの地域に分割した。その首邑はアンフィポリス・テサロニケ・ペラ・ペラゴニアであった。そしてこれらが相互に盟約を結んだり、あるいは婚姻関係を結ぶことを禁じたのである。これに加えてローマ人はマケドニア人に対して、なにがしかの盛名を有する指導者を取り上げたが、それはこうした人々から機会を見つけては、不公平

を除去することに名を借りて相続権を取り上げたり、彼らを他の土地に移住させることによってであった。パウルス・アエミリウスはマケドニアを取り鎮めるべく、その有力者たちに、その子弟共々イタリアに移住するようにと命じた。カール大帝はサクソニアの騒乱の鎮圧のため、その内の貴人たちをフランスへと移した。彼らには公的評議会を持つことも役人を選出することも、そのほか如何なるやり方で一体となることも許されなかったのである。このやりかたを用いてローマ人はカプア人の氣力を削いだ。ローマ人はカプアが農民たちに適した広大な地域であることを望んだが、そこに都市の態をなさしめず、[住民からなる] 如何なる元老院も評議会も与えなかったし、如何なる共同体や公的機関も結成させることを許さなかった。このようにすれば、この土地の多数の人々が動揺するようなことは絶えて無く、決して反乱に走ったりするようなことなくなると考えからである。カプア人たちは互いに集会を持つことさえ禁じられたのだった。サラセン人たちの君主アブダラはキリスト教徒たちに対して、夜警を行うことすら禁じた。そうであるなら我々カトリック信者が、ルター派とかカルヴァン派の手合いやモーロ人どもに対して集会を禁じるのは、ますます以て至当なことと言えるのではなかろうか。ダマスカスのイスラム君主はエルサレムを占領した際、キリスト教徒の鐘をとりあげた²⁹。それは鐘の音によって彼らが寄り集まることを防ぐためであった。同じことはトルコ皇帝により全土にわたって行われている。およそ鐘というもののほどそれが突き鳴らされた時、人の心を動かし彼らをして武器を手にとらしめるものはない。ボルドーの事例はそのことをよく教えてくれる。この街の人々は塩税に不満を持ち[鐘の音を契機として] 司政官を殺害したあげく、アリーゴ王に対して反乱に立ち上がったのだった³⁰。会話こそ契合の絆となるものであるから、支配下に入った民に対して我々の言

語を話すよう強要すべきである。それはスペインにてカトリック王がモーロ人どもに対して行ったように、もし彼ら同士が話し合いを持っていたとしても、察知できるようにとの意図からに他ならない。だが大都市についてはどう対処したらよいであろうか。そこではちょっとした騒動の風が巻き起こっただけでしばしば、住民は怒り狂い武器を手に立ち上がるのではないだろうか。エジプトのスルタンたちはカイロの街の無数の住民を恐怖して、この街に長く深い堀を縦横無尽に走らせた。その結果としてカイロは都市というより、村や集落が多数寄り集まった田園地帯のような外観を示すようになった。スルタンがこの挙に出たのも、多数の人民は上記の堀に阻まれて、容易に集結することも出来まいと考えたからに他ならない。ヴェネツィアに静穏がもたらされた多くの理由のうち最大のものの一つは、愚見によればその運河である。それはこの都市を横断し、それを多数の部分に分割している。しがってこの都市の住民は、多数の困難を乗り越え多大な時間をかけることなくしては、一堂に会することが容易ではない。そしてそうこう手間取っている間に〔統治者の側から〕、不都合の出来に対する対策が施されてしまうのである。支配下の民の分裂を策するという点において、疑念が持たれる土地の近くに城砦や入植地を配することも有効である。あるいはこうした場所の内外に、駐屯部隊を置くのもよい考えだ。トルコの皇帝はこのような目的から、15万人に達する騎兵の大軍を擁しているが、その一部はアジアにその一部はヨーロッパに配されている。彼らは200人以上の太守たちに統率され、どんな些細な反乱をも即座に鎮圧できるよう準備万端相整えているのである。だがもしこれらの施策が反覆常ない民の馴致に、どれも効果を上げないならば、彼らを分散させたり、これまでの居住地と全く異なる地域に移住させたりする必要がある。かくしてアッシリア人はユダヤ人を離散させ、彼らをカルデアの地に移住せしめた。アレクサンドロス大王

も、もし語られることが正しければ、タルタリアの地で同様の策を施した。ハドリアヌス帝はスペインで似たような政策を行っている。また同じスペインの地では西暦698年に、主キリストとエビカ王に対し謀反に立ち上がった者たちがその財産をすべて奪われ（なぜなら彼らはキリスト教徒を偽装していたから）、その妻子とともにスペイン全土に離散せしめられ、奴隷の身分に突き落とされた³¹。フランスにおいてもダゴベルト王が同様の政策を採用している³²。もしアルフォンソ7世の時代にスペインを支配したアルモサドと称されるアラブ人どもが、彼らの間に一人のキリスト教徒も生かしてはおかないとばかりに、この地に住むキリスト教徒に対しマホメット教徒になるよう強制するか、彼らを残りに死に至らしめるかしたとするなら、我々がそのカトリックへの改宗やその馴致を断念した者たちを、我々の国から追い出すことがどうしてできない訳があるか³³。

だがもし異端者どもがいそうなら、こうした教えを説く説教師や図書、そしてパンフレット類をとり除いてしまうべきであろう。アンティオコス王はユダヤ人が、習慣通りに過ぎ越し祭りを行う際、モーゼ五書を大つばらに読むことを禁じた。ディオクレティアヌス帝は、我々の宗教に属するすべての聖なる書物を焼き払うよう勅命を下した。だとすれば我々がカルヴァンや、こいつと同様の邪悪と毒麦の播種者どもの書を焼き払っていけない訳がどうしてであろうか。もっともよいお手本はコンスタンティヌス大帝その人だ。この帝は違反者を死刑に処するとの定めを以て、アリウス派の図書の焼却を臣民各自に命じる勅令を発したのである³⁴。

8 臣民が他国民と共謀することを如何に防ぐかにつき論じる

前節に論じたことから、本節に論じべきことは容易に推測できる。自身の臣民が相互に団結する手段を取り除くことが出来る君主にとり、臣下が外国人と通謀する手段をとりあげる

ことはいつそう容易なことに過ぎない。なぜなら自国民同士と同様の交際が、縁戚関係や友人関係、歓待や通商、秘密の裏取引などにより、外国人とも取り結ばれ得るからである。君主たる者はこれらを禁止し根絶しなければならぬ。このことは自国及び「自国を攪乱する」疑惑のある国に対して、間諜を用いることにより、あるいはまた国境の関所や他国との間道を監視することにより可能となる。なぜならこうした関所や間道を経て自国と他国の間を人が出入りするからである。このような監視は島国や、海とか山あるいは河川により外部から閉ざされている国においては、容易に実行し得る対策である。疑惑の対象となっている者たちを、敵に隣接した地域から遠ざけることもまた、このような問題に関しては有効であろう。この手はレパントの大海戦の翌年、トルコの皇帝により採用された手である。と言うのもこの時に彼はオッキアーリを使って、ギリシアの臨海地域から「自身の治下の」キリスト教徒を、ラテン人と通謀しないようにとの配慮から遠ざけたのであった³⁵。マケドニアのフィリポス1世と2世はこの類の手段を自由に行使した³⁶。即ち牧人が羊たちについてそうするのと同様に、一塊の人間全体をある地域から別の地域へと追い立てたのである³⁷。

1 「獲得された臣民」よりなる国家に対しては、「本来からの臣民」よりなる国家と異なる統治法が必要とされるという論点は、「複合型の君主国について」と題されたマキアヴェッリ『君主論』第3章の議論に由来するものであろう。

2 『君主論』第7章においてマキアヴェッリもまた堅固な基盤を持たぬ新国家の脆弱さを、急速に成長したためしっかりと根をもたぬ樹木のそれに喩えている。

3 シチリアの晩禱事件(1282)によるシャルル・ダンジューのシチリア島喪失や、イタリア戦争時におけるシャルル8世のナポリ王国喪失(1495)、ルイ

12世のミラノ公国喪失(1512)といった事件をさしている。

4 少なくともフランスは15世紀中に1396年～1406年の期間を含め三度、ミラノは1421年～1436年及び1464年～1499年にジェノヴァの支配権を手に入れている。

5 ミカエル8世パレオロゴスによるビザンツ帝国の復興をさす。

6 百年戦争敗北(1453)によりイギリスはプランタジネット王家が旧来より保持したフランス内所領を喪失した。

7 トルコ皇帝セリム1世はマルジュ・ダービクの戦いの勝利(1516)により、マムルーク朝エジプトを征服した。

8 マキアヴェッリ『デイスコルスイ』I-51参照。

9 ここに言うコンラート帝は神聖ローマ帝国皇帝コンラート2世、ミシコーネ公はビヤスト朝第7代のポーランド王ミエシュコ2世、オドリコはプシエミスル朝第二代のボヘミア公オールドジフのことである。

10 アイユーブ朝エジプトの君主サラディン(サラフッディーン)は1187年に聖地エルサレムをキリスト教徒より奪還し、その後もシリア支配をめぐり、英王リチャード1世等に率いられた第4回十字軍と抗争を繰り返した。

11 リヴィウス『ローマ建国史』XXIII 4-7。

12 タルキニウス・プリスクスは王政ローマ第五代の王(在位前616年～前579年)。タルキニア生まれのエトルリア人ながら、民会において選ばれて王位についたが、先王アングス・マルキウスの息子たちに殺害されたという。

13 古代ローマ人が用いた同盟による勢力拡大については、『デイスコルスイ』II-4を参照。

14 16世紀のポルトガル王(在位1521-1557)。正統カトリック信仰の普及に邁進し、ポルトガル国内に異端審問所を設置する一方、インド布教のためザビエルを初めとするイエズス会士を招聘した。

15 教育を異端・異教徒へのカトリック信仰布教の重要手段と位置づけるイエズス会は、キリスト教とルネサンス人文主義を統合した、独自の教養教

育システムを作り上げ、これを基盤にわが国の天草セミナリオや安土コレジオに代表される如く世界各地に寄宿学校や神学校を設立し、大きな成果を上げている。

- 16 エルリ人は5世紀ヨーロッパで活躍したゲルマン人の一部族。6世紀初頭ランゴバルド人に敗れ歴史から姿を消す。エバグリウス(536-594)は6世紀の活躍したビザンツ帝国の歴史家。431年～594年までを扱った『教会史』を著す。本個所は『教会史』IV, 20の既述に基づいている。
- 17 マケドニア朝第二代のビザンツ皇帝(在位886-912)。その高い教養故に〈賢帝〉と称される。
- 18 アンリ3世、アンリ4世と二代のフランス王が暗殺されているが、これらは狂信的なカトリック信者によるカトリック色の稀薄な国王に対してなされた犯行であり、ここにおける趣旨とは合わない。ここではむしろ文意を広くとって、フランソワ2世、シャルル9世、アンリ3世と続くフランス宗教戦争をボッテローが、ユグノー(プロテスタント信者)によるフランス王権簒奪の試みと捉えていたことをさすと見た方がよいだろう。
- 19 オランダ独立戦争のことを指している。
- 20 ハリカルナッソスのディオニシウス『ローマ古代誌』VII, 2。
- 21 アリストテレス『政治学』VIII-5, 7。
- 22 偽アリストテレス『問題集』XXX, 1。
- 23 プリニウス『博物誌』XXIX, 6-7。
- 24 この言葉は如何なる古典著作にもその出典を求め得ない。ボッテローはその著作『名言集』においてもこの言葉をフランス王ルイ11世に帰している。
- 25 ローマ皇帝ユリアヌス(在位361-363)は古代異教復興を掲げキリスト教徒を迫害したため、後世から〈背教者〉の称を与えられた。
- 26 ビジタはカタロニア語・ポルトガル語読みで、通常スペイン語読みのヴィティザの名により知られる末期の西ゴート王(位702-710)。
- 27 軍人皇帝時代のローマ皇帝(位276-282)。
- 28 ヴェルギリウス『アエネース』I-150。
- 29 前出(注10)サラディンのこと。

- 30 ボルドーで塩税を契機とする反乱が生じた時期から見て、このアリーゴ王はアンリ2世のことと考えられる。
- 31 西ゴート王エルギカ(前出注22のビジタの父)のこと。但し史実によれば彼の行ったユダヤ人迫害は695年のことである。
- 32 恐らくメロヴィング朝フランク王ダゴベルト2世のことであろう。
- 33 12世紀から13世紀にかけ現在のモロッコ及びスペイン・アンダルシア地方を支配した、ムワヒッド朝のことをさす。そのスペイン語なまりからアルモハード朝とも呼ばれている。
- 34 コンスタンティヌス帝の主宰の下第一回ニケア公会議が開催され(325)、アリウスが異端として断罪されている。
- 35 カラブリア生まれのイタリア人ジョバン・デオニージ・ガレーニ(1519-1587)のこと。オスマン・トルコ支配下のイスラム教徒海賊の捕虜となり自身イスラム教に改宗、海賊として成功を重ね遂にはオスマン海軍の最高指揮官にまで昇進した。レパントの海戦時のトルコ軍左翼艦隊司令官をつとめた。オッキアーリという名は、彼のイスラム名ウルク・アリ・パシヤとイタリア語の眼鏡(オッキアーリ)をかけたものであろう。
- 36 マキアヴェッリ『ディスコルス』I-26。
- 37 1596年のトリノ版以降第五巻末尾には更に、「既に出来せる騒動を如何に沈静化せしめるか」と題される、新たな章が追加されている。